

自分と相手の「大切なもの」
に気づくために

沖縄県社会福祉士会 山城健児

1.はじめに

この研修で大切にしたいこと



山城 健児

株式会社フレキシムア 代表取締役 NPO法人ぺあ・さぽーと理事

社会福祉士 主任相談支援専門員

障害福祉サービス：放課後等デイサービス IMUA

相談支援事業所 IMUA

北谷町委託相談・基幹相談

NPO法人ぺあ・さぽーと

強度行動障害支援者養成研修（基礎・実践）

中核的人材養成研修修了

これまでの虐待防止研修で、
法律や制度、虐待の事例、通報の仕組みなどを
伝えることに、多くの時間を費やしてきました



支援スキルや知識、法律の整備が進み、
施設従事者による虐待件数は
通報件数とともに増加しています。

一方で、

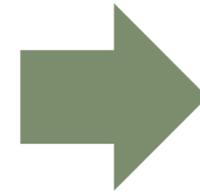
知識や制度が充実してもなお、虐待
はなくなるならない

▶なぜか??

私たちはそれぞれ、
思い込みや価値観を持っている

「当たり前」

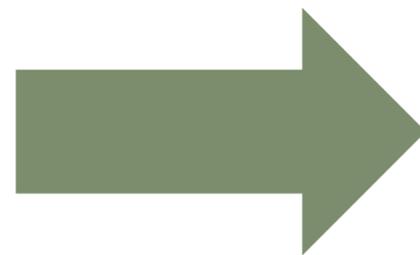
「こうあるべき」



日々の支援の中で、
行動に影響を与える

支援者自身が
自己を客観視できるようになること
が解決策となるのではないか

支援者自身が自己
を客観視できる

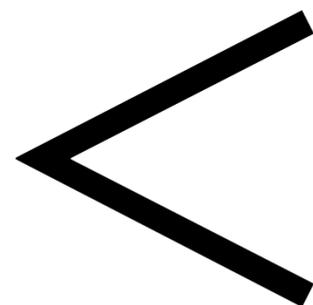


虐待を未然に防ぐ
ことにつながる

この研修における2つの目的

知る

虐待に関する法律や制度、事例



自分自身を
振り返る

支援する側・される側という
立場を超えて、
一人の人として自分自身を振り返る時間を持つ。

この研修で大切にしたいこと

「自分自身が大切にしているもの」

に気づき、同時に、

「相手にも大切にしているものがあること」

に思いを向ける

2.虐待の現状

虐待は「特別な出来事」ではない

これまでの
障害者福祉の変遷をみてみましょう

措置制度

(～平成15年3月)

1971年

(昭和46年)

- ・ 国立コロニーのぞみの園開設
- ・ 都道府県においてもコロニー開設
- ・ 障害者を施設へ「収容保護」することが中心となる

→虐待が起きやすい構造があった?

1981年

(昭和56年)

- ・ 国際障害者年「完全参加と平等」
- ・ ノーマライゼーション思潮が日本へ

→価値観の転換：
「考え方」は大きく変わってきた

2000年

(平成12年)

- ・ 社会福祉の増進のための関係法律の整理等に関する法律成立
- ・ 「措置制度」から「利用契約制度」へ

行政がサービス
内容を決定

行政が事業所
(施設) を特定

事業者（施設）が
行政からの受託者として
サービス提供

利用契約制度

2003年

(平成15年)

支援費制度

(利用者がサービスを選択できる仕組み)

2006年

(平成18年)

障害者自立支援法

2013年

(平成25年)

障害者総合支援法 (共生社会の実現)

→制度としては、
理想にかなり近づいている

障害者の自己決定を尊重
(サービス利用意向)

事業者と利用者が
対等

契約による
サービス利用

障害者福祉は

「保護・収容」から

「自己決定・対等な関係」へと

大きく価値観を転換してきた

「今は、虐待が起きないはずの時代」
とも言える。

にもかかわらず、
虐待は“今も”起きている

障害者虐待の件数

養護者(家族など)による

相談・通報件数：123件

虐待判断件数：35件

被虐待者数：35人

障害者福祉施設従事者等による

相談・通報件数：94件

虐待判断件数：25件

被虐待者数：43人

合計相談・通報件数: 217件

→家族だけでなく、施設従事者による虐待も一定数ある

令和7年度障害者虐待防止・権利擁護指導者養成研修の全体象

○障害者虐待防止・権利擁護指導者養成研修では、都道府県の行う障害者虐待防止・権利擁護研修において企画・運営、講師等を担う指導者を養成する。

○これまで、都道府県研修の実施内容にばらつきが大きかったことから、令和6年度から都道府県研修における標準的なカリキュラムを提示した。当カリキュラムの内容について講義・演習を通して都道府県に伝える。

（都道府県研修においては、標準的な研修カリキュラム以上の内容を実施することを地域生活支援事業の実施要綱上明記）

○また、都道府県のスキルアップのための国研修独自の講義・演習も実施する。

ア 【講義部分】※事前視聴

共通講義

- I 障害者虐待総論-成立までの経過、社会的意義
- II 障害者虐待防止法の概要
- III 当事者の声
- IV 性的虐待の防止と対応
- V 身体拘束等の適正化の推進
- VI 通報の意義と通報後の対応～通報はすべての人を救う～

自治体コース講義

- I-1 養護者による障害者虐待の防止と対応①
- I-2 養護者による障害者虐待の防止と対応②
- II 障害者福祉施設従事者等による障害者虐待の防止と対応
- III 使用者による障害者虐待の防止と対応
- IV 事実確認調査における情報収集と面接手法(基礎編)
- V 事実確認調査における情報収集と

管理者・虐待防止責任者コース講義

- I 法人・事業所の理念と管理者の役割
- II-1 虐待を防止するための日常の取組について①
- II-2 虐待を防止するための日常の取組について②～身体拘束・行動制限の廃止と支援の質の向上～
- III 虐待が疑われる事業への対応
- IV 障害者虐待防止委員会、身体的拘束等の適正化委員会と虐待防止責任者の役割
- V 虐待防止委員会の実際の運営につ

イ 【演習部分】※伝達研修

自治体コース演習

- 演習① 養護者による障害者虐待防止の通報受理から養護者支援の検討にかけての演習
- 演習② 施設従事者による障害者虐待防止の通報受理から事業所指導の検討にかけての演習

管理者・虐待防止責任者コース演習

- 演習① 虐待が疑われる事業への対応
- 演習② 虐待防止委員会の活性化
- 演習③ 身体拘束適正化委員会の運営

ウ 【国研修独自部分】※スキルアップ

共通

- 特別講義① 虐待防止関連の最新行政説明
- 特別講義② 障害者虐待を防止するために(社会全体の動向も踏まえて)
- 特別演習① 判断に迷う虐待事業に関するグループワーク・意見交換
- 特別演習② 元気な都道府県の実践を聞いて情報交換!
- 特別演習③ どう進める? 都道府県での伝達研修

※アの動画は国において作成し、ホームページで公開中

(Ⅲ 当事者の声を除く)

制度も知識も整っている。

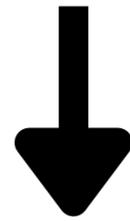
それでも虐待が起きるのは、なぜか。

「虐待をする人が悪い」だけで
語れる話ではないのでは？

3.虐待の背景を考える

「なぜ、虐待は起きるのか」

虐待を防ぐためには、「何が虐待か」を知るだけでは十分ではありません。



なぜ、その行為が起きてしまったのかを理解する視点が必要です。

虐待の発生要因となりうるもの

教育・知識・介護技術
などに関する問題
(ハウツー?)

支援者のストレスや感情
コントロールの問題
(自己理解)

倫理観や理念の欠如
(在り方)

虐待を助長する組織風土や
支援者間の関係性の悪さ
(チームワーク)

人員不足や人員配置の問題
及び関連する多忙さ
(マネジメント)

虐待の発生要因となりうるもの

教育・知識・介護技術などに関する問題（ハウツー？）
支援者の感情コントロールの問題
倫理観・理念の欠如（在り方）
リスク要因が多岐にわたる
個人だけの問題ではない

支援者・組織・環境が絡み合っている

虐待を助長する組織風土や
支援者間の関係性の悪さ
（チームワーク）

人員不足や人員配置の問題
及び関連する多忙さ
（マネジメント）

虐待の発生要因となりうるもの

では、支援の現場では、

本人と支援者のあいだで

どのような状態が生まれている

のでしょうか。

教育・知識・介護技術
などに関する問題
(ハウツー?)

支援者のストレス、感情
コントロールの問題
(自己管理)

倫理観や理念の欠如
(在り方)

虐待を助長する組織風土や
支援者間の関係性の悪さ
(チームワーク)

人員不足や人員配置の問
題及び関連する多忙さ
(マネジメント)

支援の現場で、いま何が起きているのか

支援の現場では、本人の特性と環境がうまく噛み合わないことで、本人も支援者も、強い負荷を抱えた状態になることがあります。

その一つとして、次に「強度行動障害」について考えていきます。

強度行動障害とは

自傷、他害、こだわり、ものの壊し、睡眠の乱れ、異食、多動など、本人や周囲の人の暮らしに影響を及ぼす行動が、著しく高い頻度で起こるため、特別に配慮された支援が必要になっている「状態」。

強度行動障害とは

強度行動障害になりやすいのは、重度・最重度の知的障害があったり、自閉症の特徴が強い、「コミュニケーションが苦手な人」です。

なぜ強度行動障害になるの？

障害特性（コミュニケーションの苦手さや感覚の過敏性など）に環境がうまく合っていないことが、人や場に対する嫌悪感や不信感を高め、行動障害をより強いものにしていきます。

なぜ強度行動障害になるの？

強度行動障害として現れている行動は、本人の「困りごと」や「伝えたいこと」が、うまく届いていない状態とも考えられます。

なぜ強度行動障害になるの？

障害特性（コミュニケーションの苦手さや感覚の過敏性など）に環境がうまく合っていないことが、人や場に対する嫌悪感や不信感を高め、行動障害をより強いものにしていきます。

では、人と人との間で「伝える」「伝わる」とは、
どういうことなのでしょう。

“コミュニケーション”について考えてみよう

「コミュニケーション」とは？

人と人との間で情報や意見を伝えあう事

(言葉、身振り、手振り、表情などさまざま)

“コミュニケーション”について考えてみよう

「コミュニケーション」がうまくいかないと

誤解やすれ違いが生じる可能性高くなる

“コミュニケーション”について考えてみよう

「コミュニケーション」で大切なこと

相手の話に耳を傾けるだけでなく、
自分も率直に意見や感情を伝えることが重要



良好なコミュニケーションは
人間関係だけでなく仕事や学業でも重要

“コミュニケーション”について考えてみよう

「**コミュニケーションの大切さは、**

多くの人「知っている」ことです。

相手の話に耳を傾けるだけでなく、

自分も率直に意見や感情を伝えることが重要

それでも現場では、意図せず

相手を傷つけてしまうことがあります。

人間関係だけでなく仕事や学業でも重要

支援者である前に、一人の「人」である

私たちもまた、不安や疲労、満たされなさを抱える存在。

反射的に虐待や攻撃に走らないために、とっさの場面で自分に立ち返る3つの視点をご紹介します。

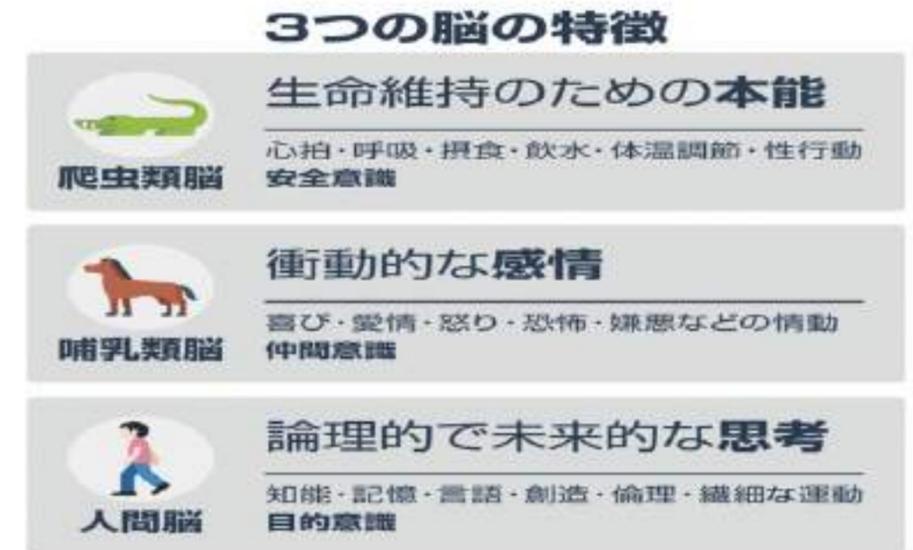
虐待の発生要因を軽減する3つの視点



氷山モデル



マズローの
欲求の階層



脳の三層構造
仮説

① 氷山モデル

— 行動の“下”に何があるか

目に見える行動（怒鳴る・拒否・叩くなど）は氷山の一角

その下には、不安・疲労・満たされない欲求・理解されない苦しさが隠れている

「問題行動」ではなく
“状態のサイン”として行動を見る



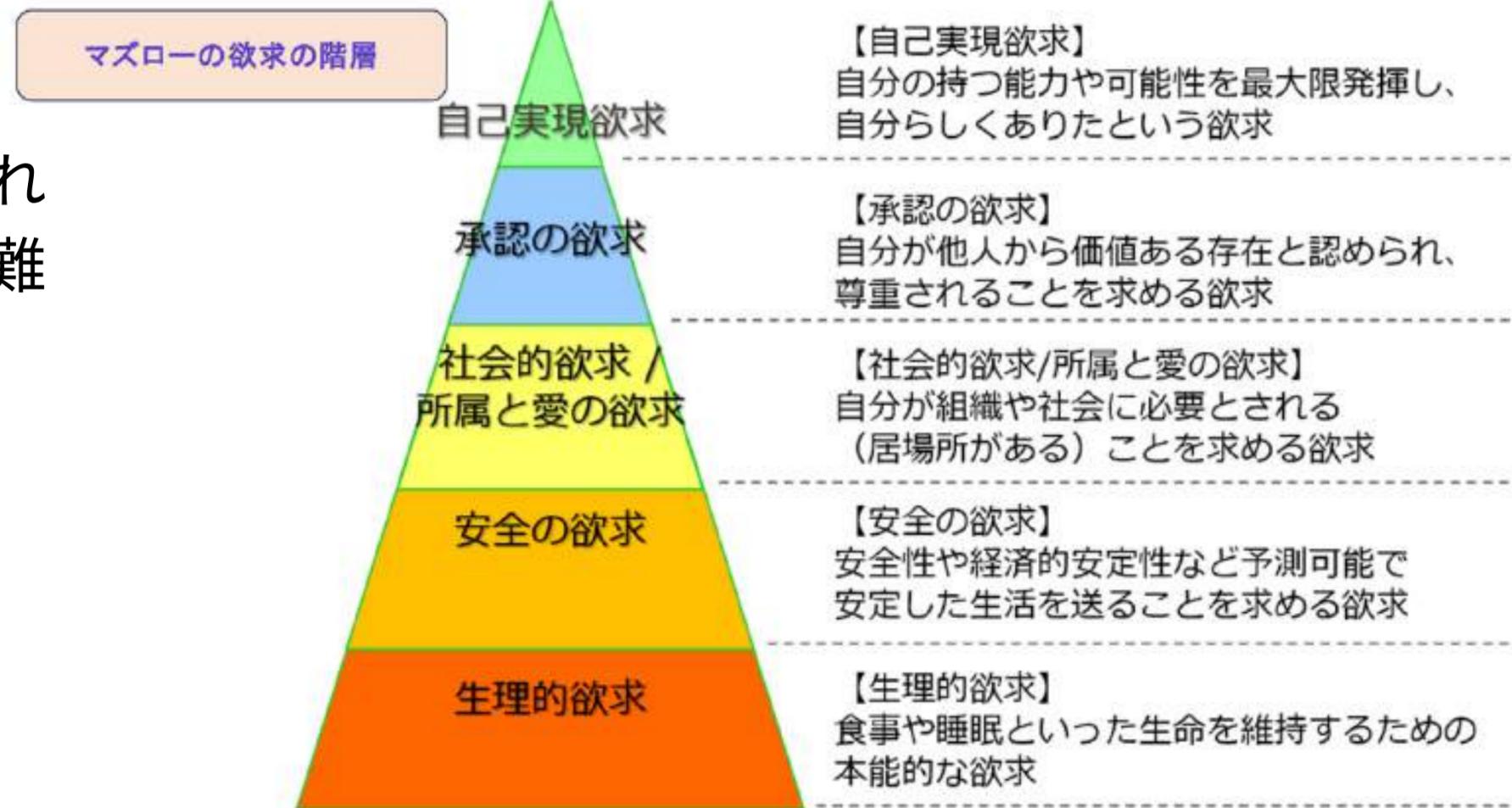
▶ 強度行動障害・虐待のどちらにも共通する土台の視点

② マズローの欲求の階層

— 満たされていない欲求に気づく

人は、安全・安心・休息・承認が満たされないと、理性的に振る舞い続けることが難しくなる

利用者だけでなく、支援者自身も同じ



▶ 「なぜ余裕がなくなるのか」「なぜイライラが抑えられないのか」
を責めずに理解するための視点

③ 脳の三層構造

— なぜ“反射的”に行動してしまうのか

強いストレスや恐怖を感じると

→ 理性的な脳よりも

→ 原始的な脳が優位になる

その結果

- 考える前に手が出る
- 強い言葉が出る
- 相手を「危険」と認識してしまう

3つの脳の特徴



爬虫類脳

生命維持のための本能

心拍・呼吸・摂食・飲水・体温調節・性行動
安全意識



哺乳類脳

衝動的な感情

喜び・愛情・怒り・恐怖・嫌悪などの情動
仲間意識



人間脳

論理的で未来的な思考

知能・記憶・言語・創造・倫理・繊細な運動
目的意識

ポール・マクリーンの脳の三層構造の仮説

現代の神経科学や分子遺伝学の研究では厳密なモデルとしてこの理論を裏付ける証拠は得られていない。しかし、脳の構造と進化の大まかな理解や認識を得るのには役立つ仮説である。

▶ 「わかっていたのに出来なかった」を人間の仕組みとして理解する視点

虐待の発生要因を軽減する3つの視点

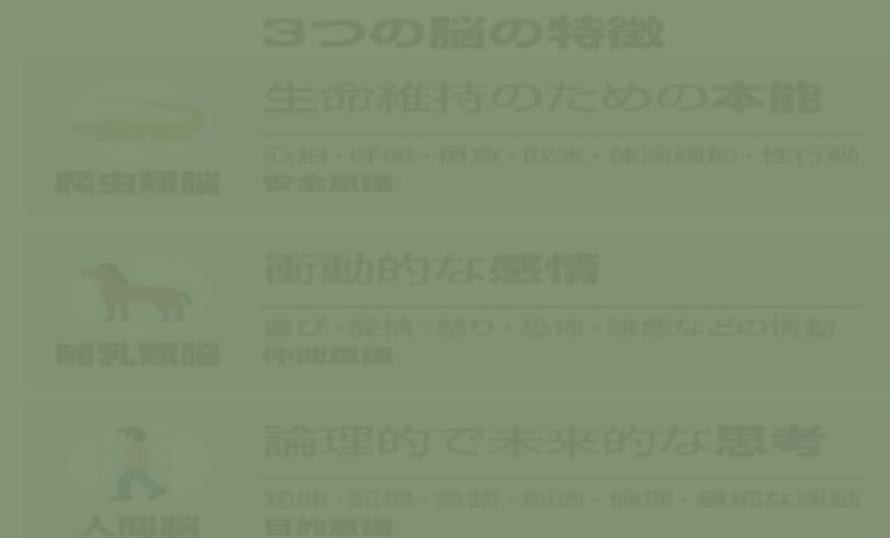
人は、状態・欲求・脳の反応によって、
意図せず反射的な行動を取ってしまう存在である。

行動を「脳と神経の反応」として捉えてみる

氷山モデル

マズローの
欲求の階層

脳の三層構造
仮説

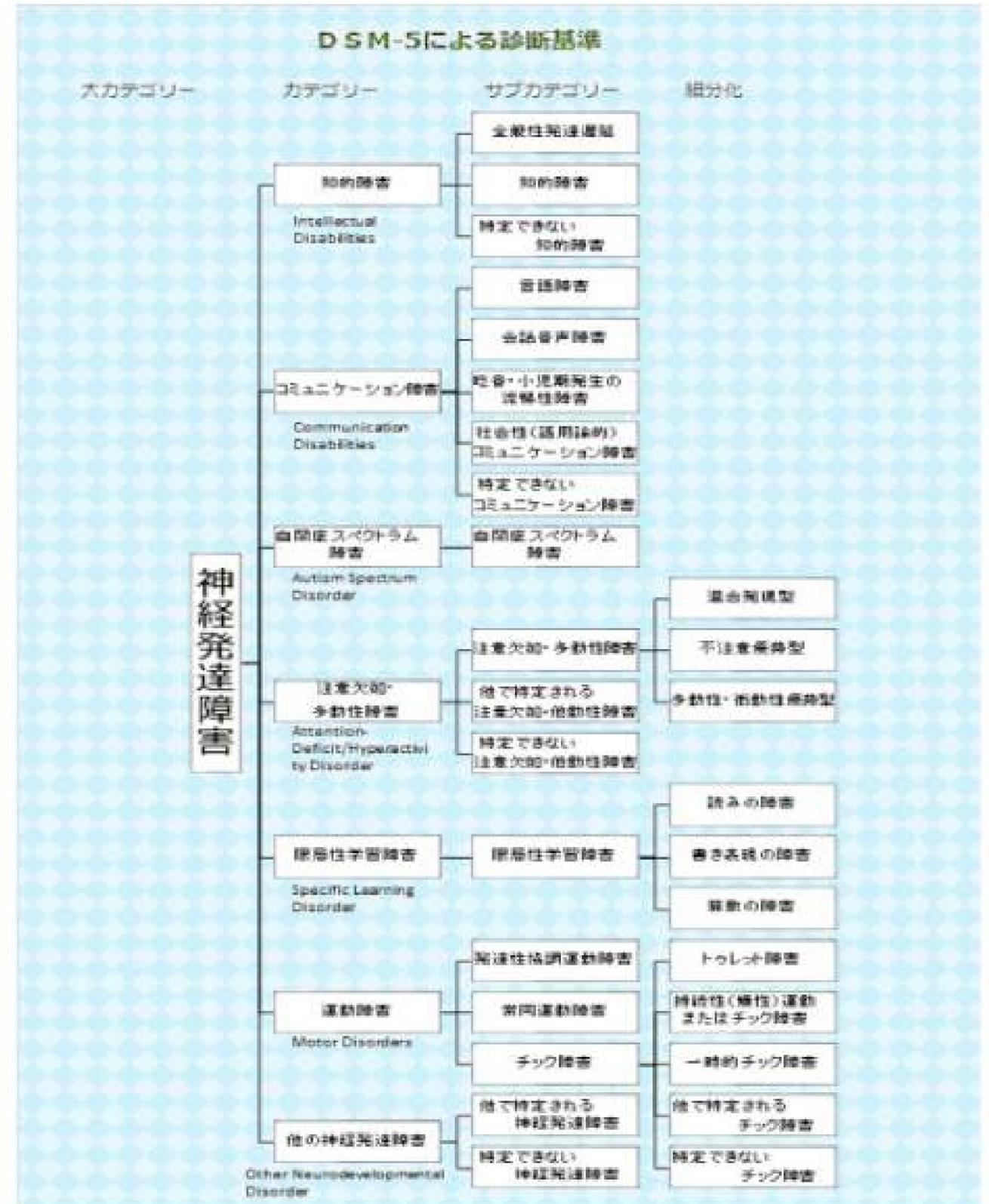


発達障害

→神経発達（症）障害

行動や困りごとは、

「性格」や「わざと」ではなく
神経発達の特徴とし理解できる



(図：DSM-5による診断基準)

DSM-5による診断基準

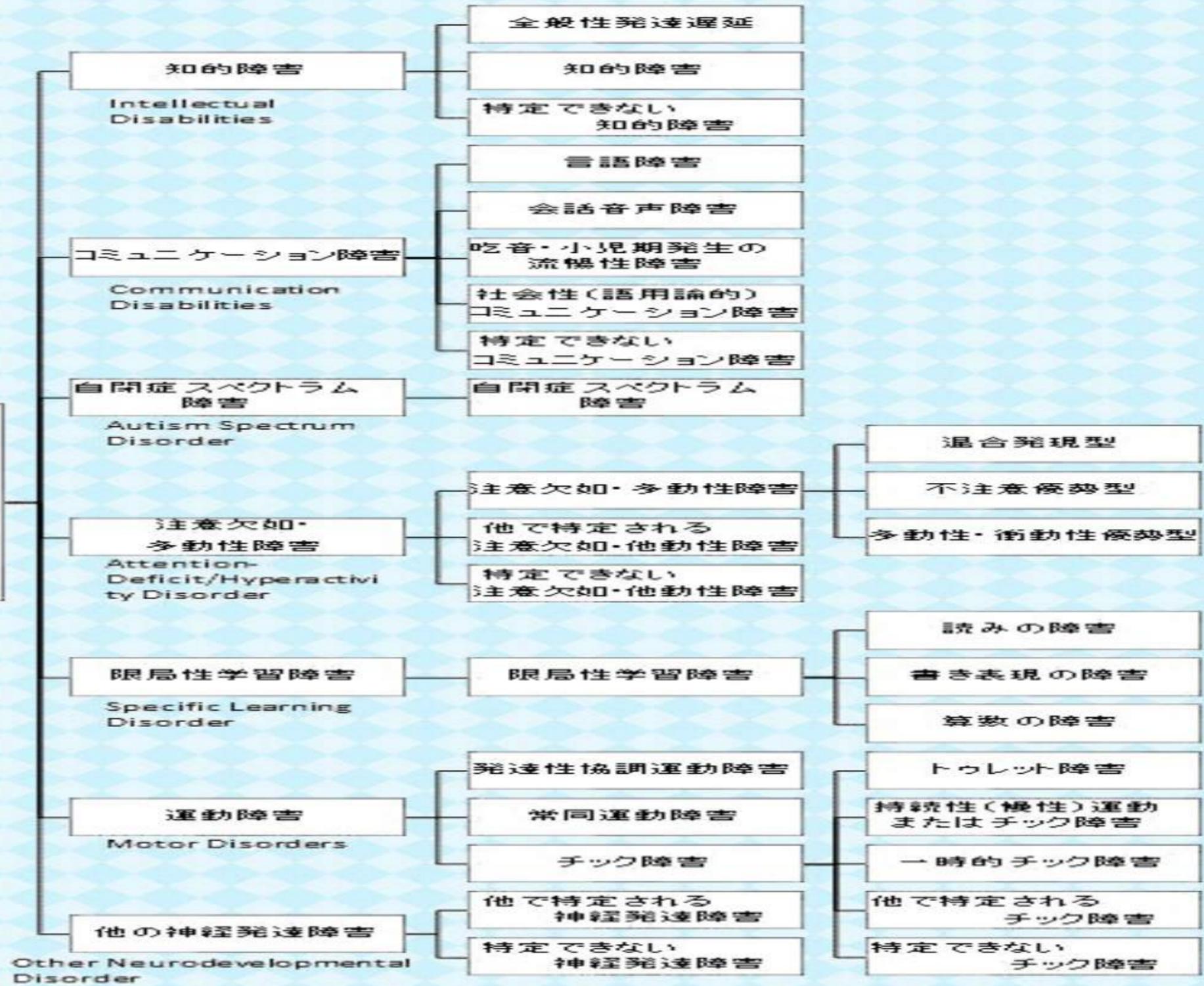
大カテゴリー

カテゴリー

サブカテゴリー

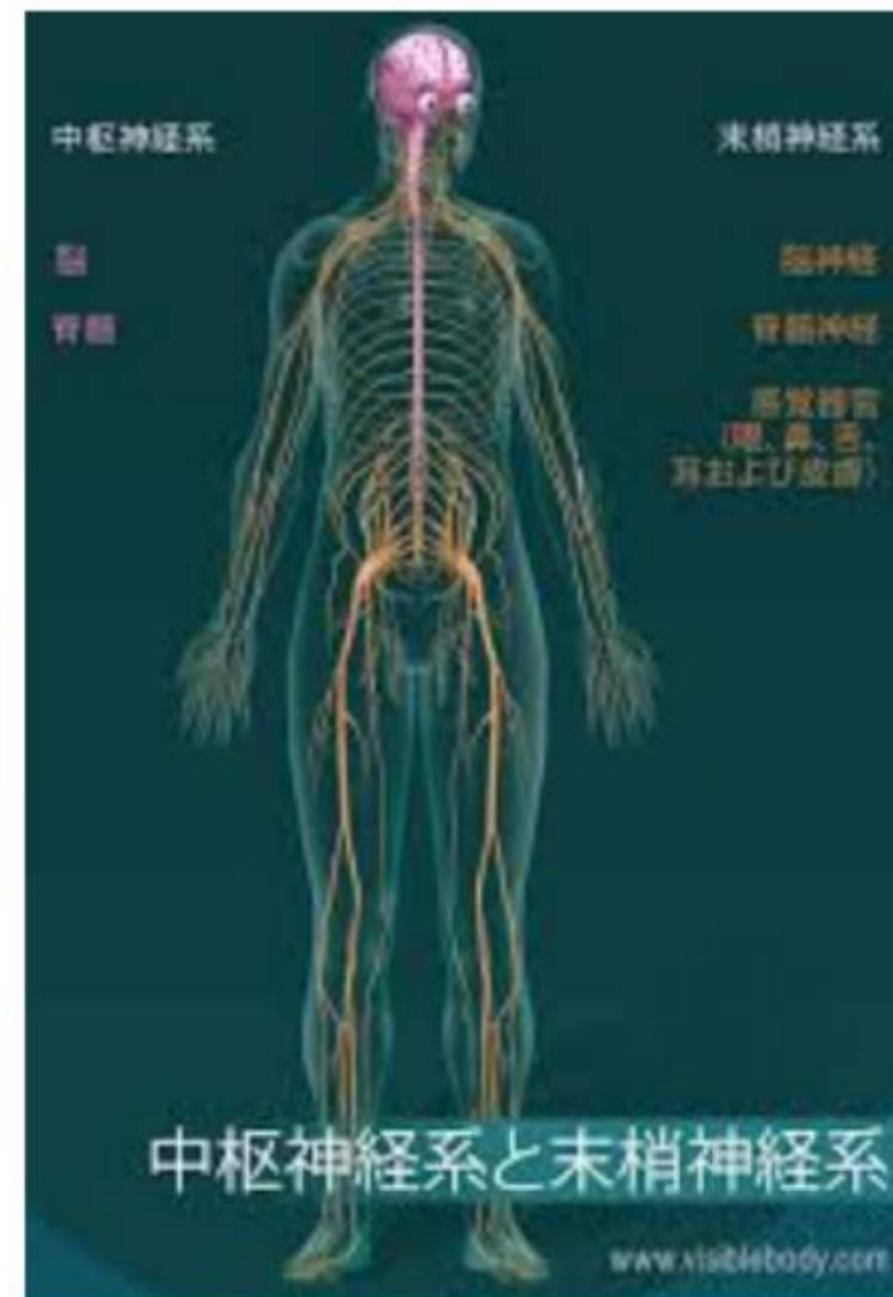
細分化

神経発達障害



(図：DSM-5による診断基準)

神経とは？



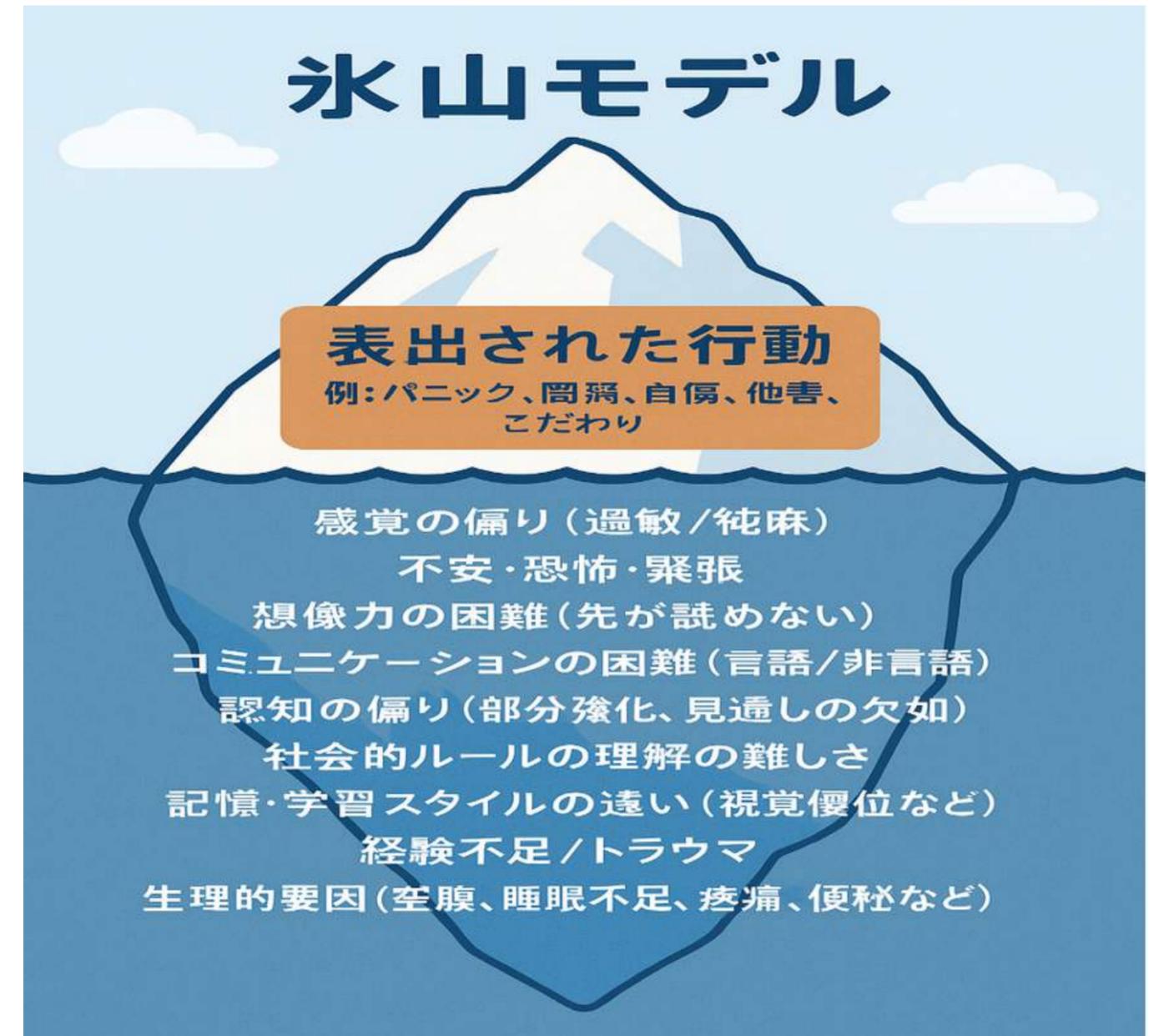
「虐待の背景を考える」まとめ

- 虐待の発生要因は、知識不足だけではなく環境・関係性・ストレス・組織風土など、複数の要因が重なって生じる
- 強度行動障害も、本人の「問題」ではなく障害特性と環境のミスマッチの中で生じている「状態」である
- 人は、安心・安全が脅かされると理性的に考えることが難しくなり、反射的な反応を取りやすくなる

虐待は「悪意のある人」が起こすものではなく
「考えられない状態」や「追い込まれた状態」の中で起きてい
る場合が多いのです。

ワーク①

利用者の課題となる行動を思い浮かべてください



4.判断と行動を左右する「人の状態」

自分を知る視点

人の状態は大きく3つに分かれる

リラックスした 覚醒状態

何か楽しいことをしている時に世界が幸せな場所だと思える

臨戦状態

直感的に脅威だと判断される要素が周りにあり、世界は危険で怖い場所であるように思えてしまう

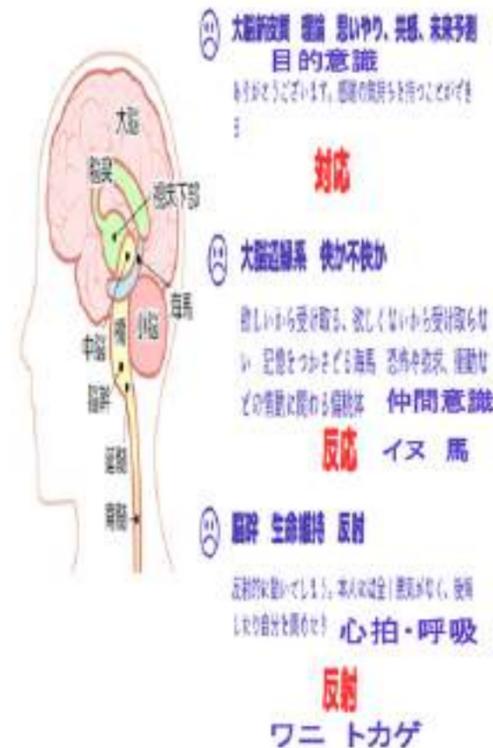
衰弱状態

恐怖などに圧倒されてしまい、感覚が麻痺したように感じることもさえあり、世界が絶望的に感じられる

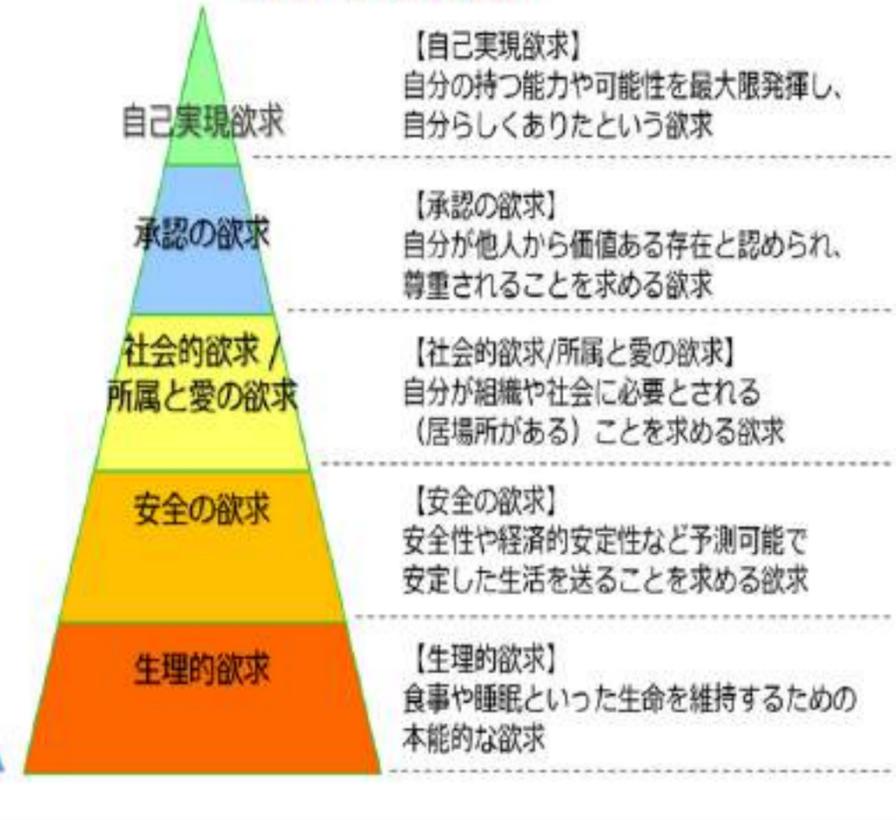
この「状態の違い」は、
私たちの行動や判断に大きな影響を与えています。



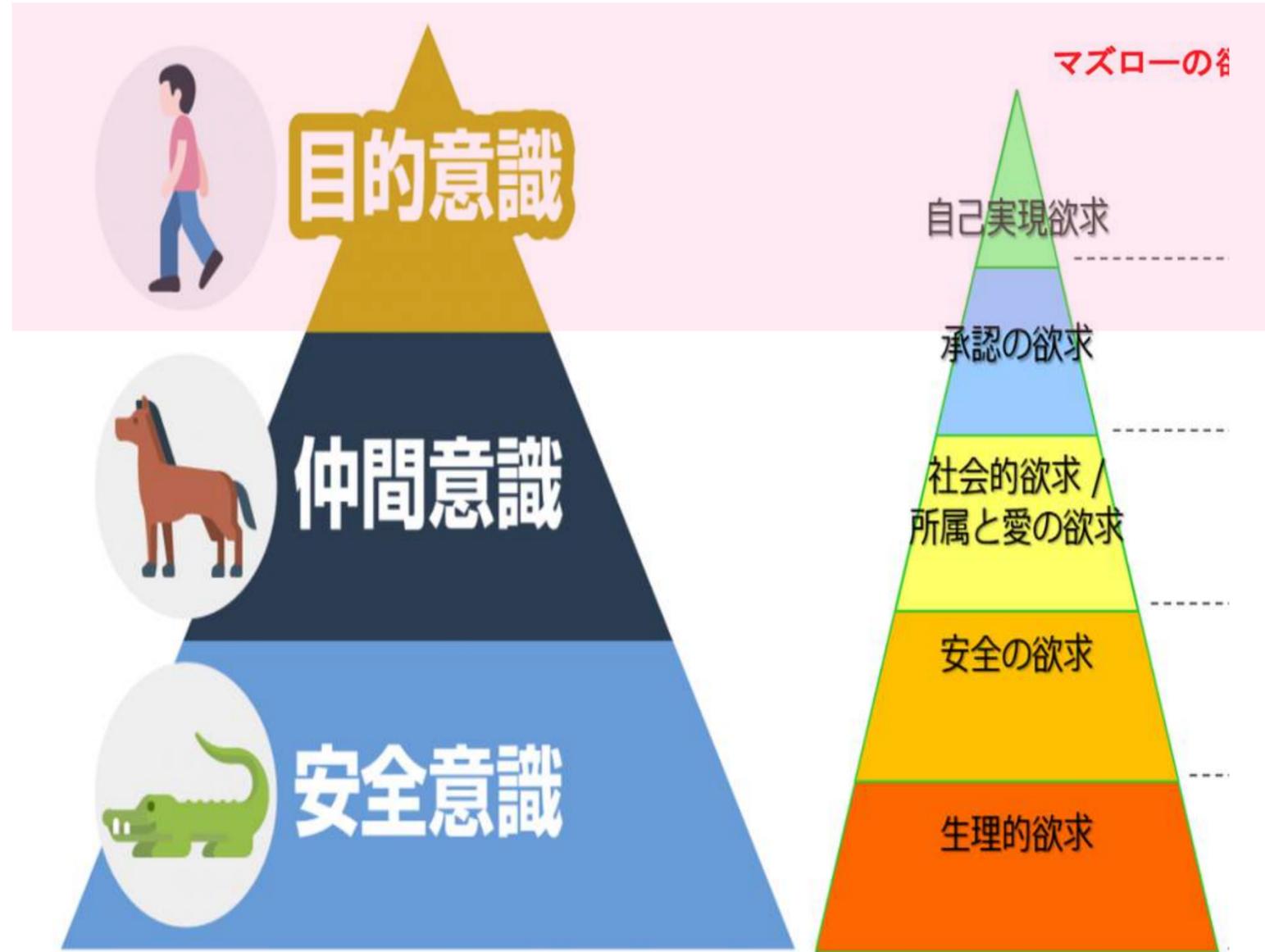
行動レベル



マズローの欲求5段階



安心・安全を感じているとき



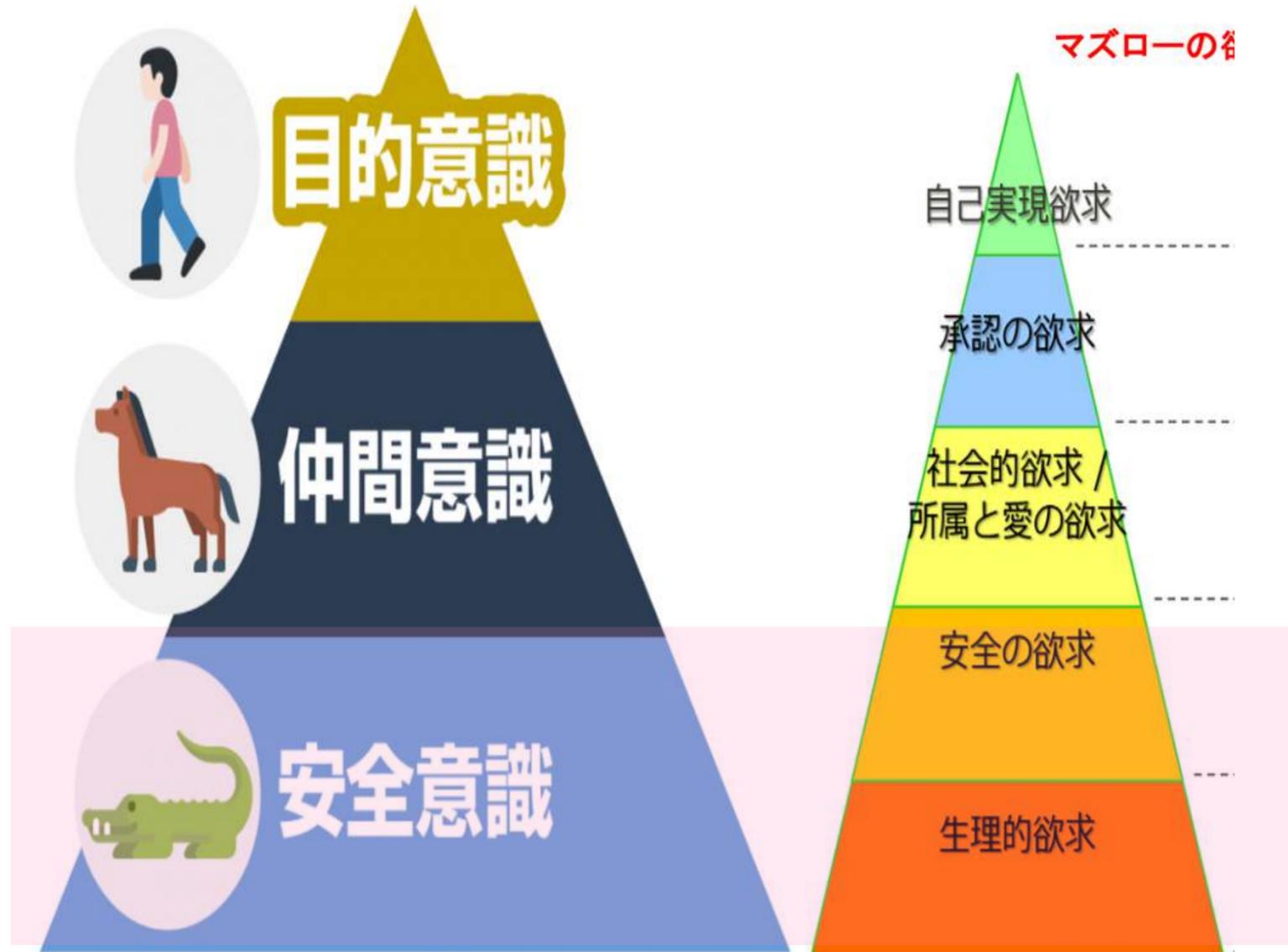
安心・安全

リラックスした
覚醒状態



言葉や知識を使って、理性的に考えることができる。

脅威を感じたり、追い込まれた状態



脅威・追い込まれ

臨戦状態



脳は「生き延びること」を最優先し、
反応・反射レベルの行動をとりやす
くなります。

つまり、
人は「状態」によって判断や行動が変わる

ここまでの振り返り | 状態が行動をつくっている

安心・安全な環境が確保されないと、人は生命維持反応を優先し、反応・反射レベルの行動をとりやすくなる

逆に、安心・安全が感じられる場では、大脳を働かせ、言葉や知識を用いて理性的に考えることができる

ここまでの振り返り | 状態が行動をつくっている

行動障害のある利用者のパニックも、
虐待をしてしまう支援者の「カッとなる」反応も、
同じ構造の中で起きている可能性がある

支援者自身も、安心・安全がない環境では、
知識やセルフメンテナンスだけでは限界がある

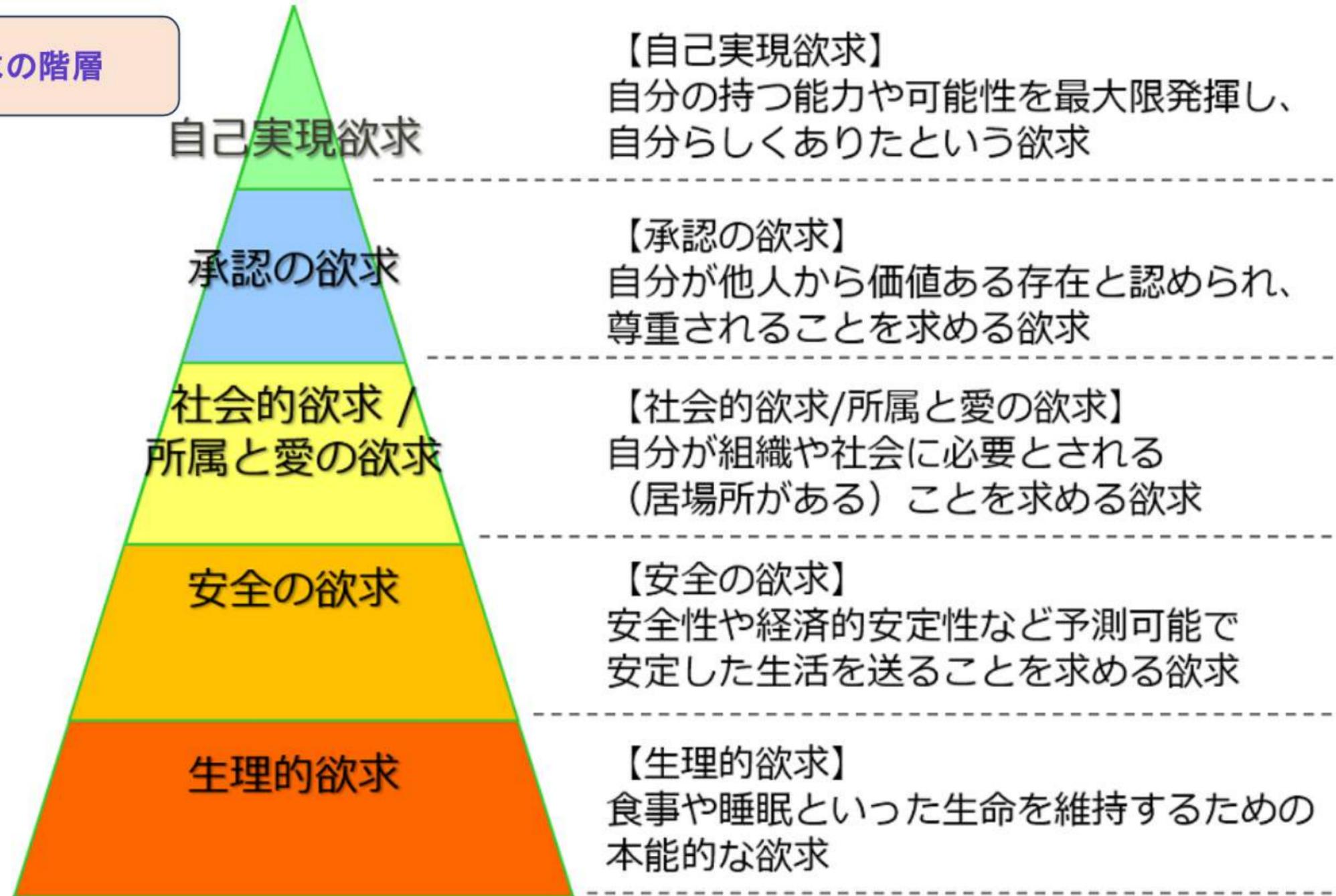
虐待を防ぐためには

- ①適切な支援の知識
 - ②セルフメンテナンス
 - ③安心・安全な環境
 - ④自分を知り、相手を知ろうとする姿勢
 - ⑤命を大切にすることを共有できるチーム環境
- これらを組み合わせて考えることが大切

ワーク②

自分自身、目の前の
利用者について探究
してみてください

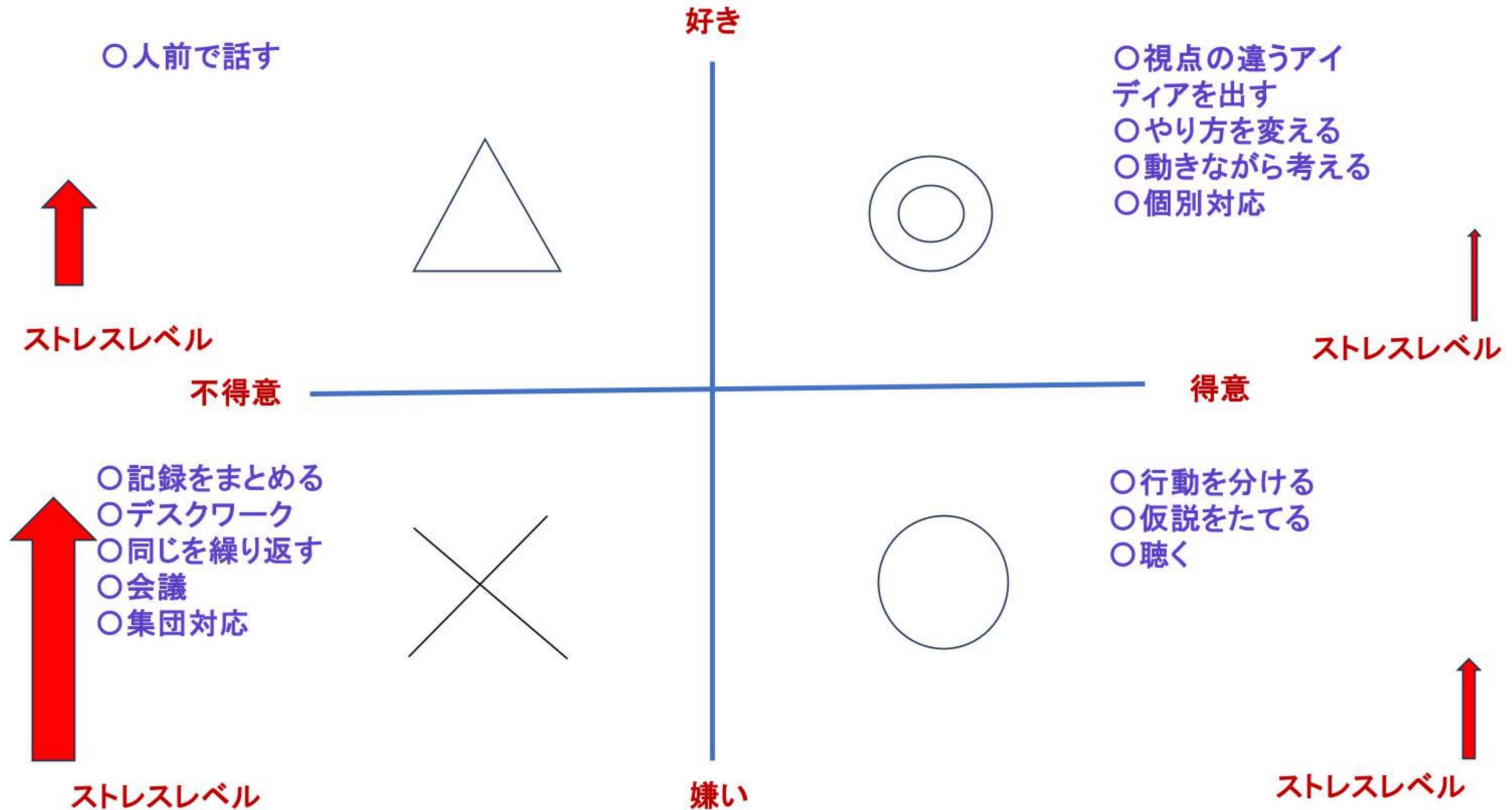
マズローの欲求の階層



4.セルフメンテナンスと環境

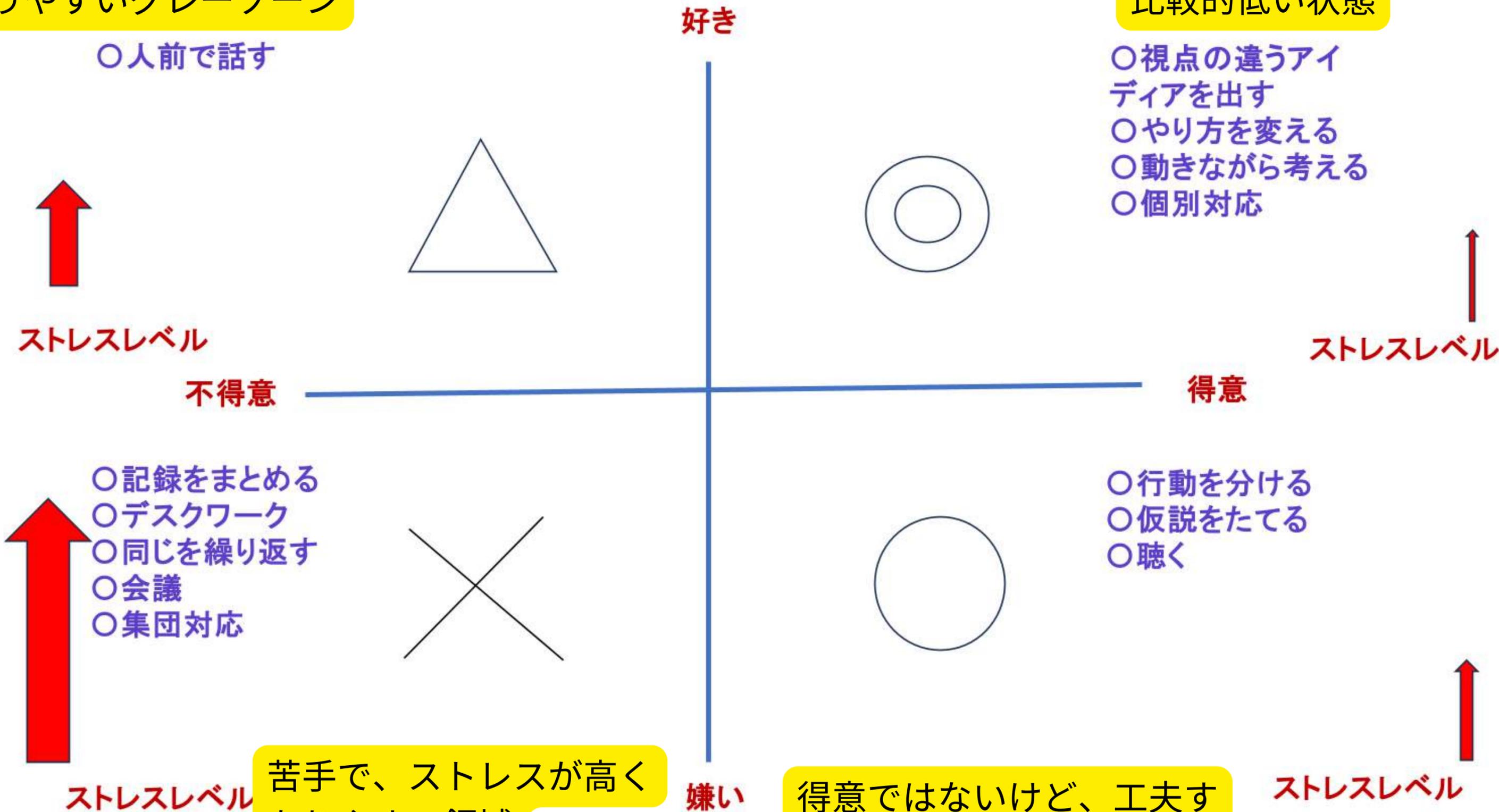
支援する人が、支援し続けるために必要な土台

人には“向き・不向き”があり、それがストレス量を大きく左右する



好き嫌いはあるが、ストレスが上がりやすいグレーゾーン

強みが生きて、ストレスも比較的低い状態



○人前で話す

- 視点の違うアイデアを出す
- やり方を変える
- 動きながら考える
- 個別対応

- 記録をまとめる
- デスクワーク
- 同じを繰り返す
- 会議
- 集団対応

- 行動を分ける
- 仮説をたてる
- 聴く

苦手で、ストレスが高くなりやすい領域

得意ではないけど、工夫すればできる

好き嫌いはあるが、ストレスが上がりやすいグレーゾーン

強みが活きて、ストレスも比較的低い状態

好き

○人前で話す

- 視点の違うアイディアを出す
- やり方を変える
- 動きながら考える

同じ仕事・同じ環境でも、人によって“ストレスのかかり方”はまったく違う

ストレスレベル

ストレスレベル

不得意

得意

- 記録をまとめる
- デスクワーク
- 同じを繰り返す
- 会議
- 集団対応

- 行動を分ける
- 仮説をたてる
- 聴く

支援者が追い詰められるのは、意識や努力が足りないからではなく、

特性と役割・環境が噛み合っていないからかもしれない

ストレスレベル

苦手で、ストレスが高くなりやすい領域

嫌い

得意ではないけど、工夫すればできる

ストレスレベル

好き嫌いはあるが、ストレスが上がりやすいグレーゾーン

強みが活きて、ストレスも比較的低い状態

好き

○人前で話す

- 視点の違うアイデアを出す
- やり方を変える
- 動きながら考える
- 個別対応

- ✓「自分はどこにいと消耗するのか」
- ✓「どこにいと力を発揮できるのか」
- ✓「それをチームでどう補い合えるか」

ストレスレベル

ストレスレベル

- 記録をまとめる
- デスクワーク
- 同じを繰り返す
- 会議
- 集団対応

- 行動を助ける
- 仮説をたてる
- 聴く

ストレスレベル

苦手で、ストレスが高くなりやすい領域

嫌い

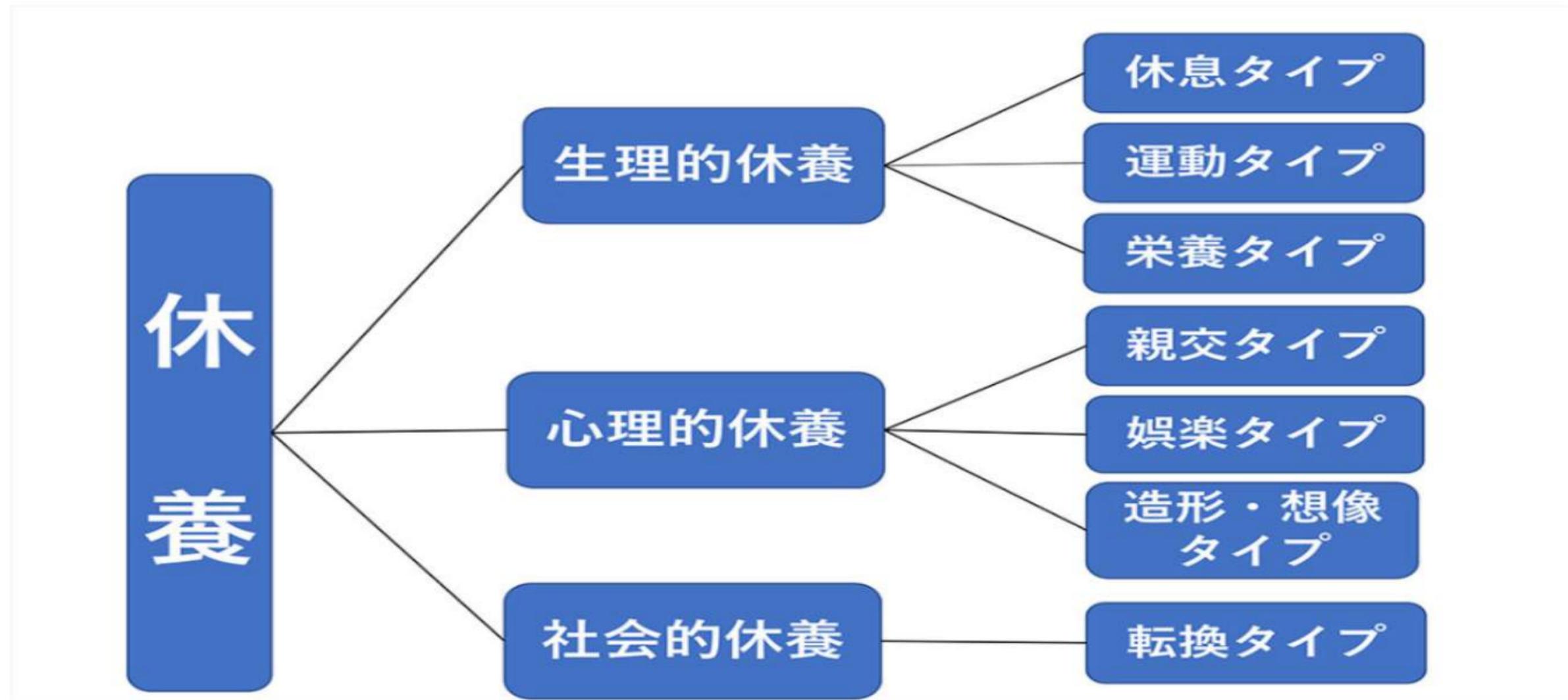
得意ではないけど、工夫すればできる

ストレスレベル

とはいえ、
向いていない役割や場면을ゼロにすることは
難しく、どうしてもストレスはかかります。
では、そのストレスや消耗を
どのように回復させればよいのでしょうか？

“休養”の種類とタイプ

●7タイプの休養モデル（杉田・片野式）



出典：「休養学基礎」メディカ出版

生理的休養

▶ 身体の回復

休息：睡眠・何もしない

運動：軽い運動で循環を戻す

栄養：エネルギー補給

心理的休養

▶ 感情・思考 の回復

親交：安心できる人とのつながり

娯楽：楽しさ・笑い

造形・想像：考えなくていい没頭

社会的休養

▶ 役割・立場 からの回復

転換：いつもの「支援者」「職員」や役割から離れる

支援者である私たち自身が、
自分の特性を理解し、
回復しやすい休養を選ぶことで、
良い状態を保ちながら支援を続けていくことが
大切です。

ワーク③

あなたがこれまで手に入れた大切なもの、これから手に入れた大切なものを出来るだけ多く上げてください。

自分の「大切なもの」と、相手の「大切なもの」

人は誰でも、大切にしているものを持っています。

それを失いそうになったとき、人は強く反応します。

支援される側にも、支援する側にも、
それぞれの「守りたいもの」があります。

通報はすべての人を救う

通報がもつ本当の役割

通報は、罰するための行為ではありません

軽微な段階で通報されれば——

- 利用者の被害は、最小限で留められる可能性があります
- 虐待をしてしまった職員にも、やり直す道が残されます
- 施設や法人も、立て直すための時間と選択肢を持てます

通報は、利用者・支援者・施設・法人すべてを守るための行動です。

出典：障害者福祉施設等における障害者虐待の防止と対応の手引き

「気づいたとき」に動けるかどうか

これまでの深刻な虐待事案の多くは、最初は「軽微な行為」でした。
しかし、

- 気づいても通報されなかった
- 見て見ぬふりをされた

その結果、行為はエスカレートし、
取り返しのつかない被害へと発展しています。

最初に違和感を覚えたとき、通報できたかがどうか、その後の大きな分かれ道になります。

通報は、誰かを罰するためではなく、
これ以上、失うものを増やさないための行動です。

まとめ

虐待を防ぐために大切なこと

虐待を防ぐために、私たちが大切にしたいこと

虐待を防ぐために必要なのは、「我慢」や「根性」ではありません。

私たちはこれまでのスライドで、次のことを見てきました。

研修内容の振り返り

- 人は、追い込まれた状態では理性的に考え、選択することが難しくなる
- 利用者の行動も、支援者の反応も「状態」や「環境」の影響を大きく受けている
- だからこそ知識だけでなく、自分の状態に気づき、整える視点が欠かせない

虐待を防ぐために大切なのは…

- ① 適切な支援の知識
- ② セルフメンテナンス
- ③ 安心・安全なチーム環境
- ④ 自分を知り、相手を知ろうとする姿勢
- ⑤ かけがえのない命への意識

これらを、一人で抱え込まないことです。

虐待をしないことは、
「善人だからできること」ではありません。

**脳や欲求、人の状態の特性を理解して
対策をしている人が、できること。**

通報は、誰かを責める行為ではなく、
大切なものを、これ以上失わないための選択です。

ご清聴

ありがとうございました